

横山ゆずり作 **「恵理子ーある旅立ち」**

<前編>

(効果音) (朝食の様子。食器の触れ合う音)

森山恵理子 ごちそうさま。

母 あら、もういいの？

恵理子 行ってきます。

母 あ、恵理子さん、今日は早く帰れるんでしょ？ ピアノのレッスンがある日ですからね。先生、4時にはお見えになるから、いいわね？

恵理子 …分かんない。(言いながら出ていく)

母 あ、ちょっと、「分かんない」って、恵理子さん、恵理子さん！

(効果音) (学校のガヤ)

A子 おはよう！

恵理子 おはよう。

B子 恵理子、おはよう！

恵理子 ああ、おはよう。

B子 何よお、恵理子、シケた顔しちやってえ。ね、今日、帰りさ、渋谷のゲームセンターによってかない？ 今さ、バックマンで9,000点出してやっから。

恵理子 ほんとに？ どうしようかなあ。

A子 行く！ あたし、付き合っただけ。そいでさ、帰りにサーティーワンでアイスクリーム食べよ。ああ、でもさ、恵理子はダメなんじゃないの？ だってさ、(おどけて)恵理子お嬢様は、今日は、おピアノのレッスンじゃございませんのお？(笑い)

恵理子 何よ、もう。バカにして。

B子 でもさ、恵理子、ほんと無理しないでいいよ。おばさんに心配かけちゃ悪いしさ。

恵理子 え？ いいのよ、お母様なんて。

A子 出ました！ 恵理子の「お母様」！ これだからお育ちのいい子はヤだよ。まあ、恵理子んちのお母さんは、いかにも“お母様”って感じだけどね。(口マネで)「いつも、うちの恵理子がお世話になりました」なーんちゃってさ。そこいくと、うちなんかさ、「母ちゃん」「あいよ！」だもんねえ。あーあ、格が違うよね。

恵理子 わたし、今日、一緒に行くから。

B子 平気なの？

B子 大丈夫だって。ね、恵理子。あんたも、この際、少し親離れしたほうがいいんだよ。じゃ、また、放課後ね。

一同 (口々に)「じゃね」「バイバイ」

恵理子モノローグ あーあ、まったくみんな、勝手なこと言ってくれちゃって。でも、あたしも最近、ちょっとうとうしいなって思うとき、あるのよね、うちの親。(ため息)

ナレーション ため息の主は、森山恵理子。青春中学の3年生です。何不自由なく、豊かな家庭に育った彼女、一人娘ということもあって、両親の愛を一身に受けて…と
言いたいところですが――。

(効果音) (玄関の戸を開ける音)

恵理子 (2階へ上がる階段の音)

母 恵理子さん？ 恵理子さんなの？ どうしたの、こんなに遅くまで？ 今日はピアノだからって言っておいたじゃありませんか。早川先生、2時間も待っててくださったのよ。恵理子さん、聞いているの？

恵理子 ごめんなさい。

早川先生 お母さん、もういいんです。それより恵理子さん、遅くなっちゃったけど、レッスン始めましょ。

(効果音) (ピアノのレッスン。恵理子、たびたびつかえる。恵理子、イライラして鍵盤をたたきつける。)

母 恵理子さん、なんてことするの？ 先生、申し訳ございません。このこつたら、今日はどうかしてるんですわ。恵理子さん、あなた、お母様とのお約束、毎日2時間ずつおけいこするっていうお約束、守ってなかったのね。(先生に)きちんとおけいこすれば、本当は上手に弾けるんですのよ。とにかく、今日のところは…。

早川先生 (母の言葉を無視して) 恵理子さん、あなたが自分から本当にレッスンしたいと思えるようになったら、わたしに連絡してちょうだい。自分でね。それじゃお母さん、今日はこれで失礼します。

母 恵理子さん、あなた、このごろどうしたの？ 前は、なんでもお母様に話してくれたのに。ね、何か悩みがあるのなら、お母様に言ってちょうだい。ね？

恵理子 別に…。お父様は？

母 お父様は今日もテレビ局のお仕事よ。お帰りは真夜中でしょ。接待だかなんだか知りませんが、いつも忙しい、忙しいって、家の中のことなんか、ちっとも考えてくださらないんだから。ねえ恵理子さん、お母様はあなただけが頼りなの。分かってくれるわね？ ね？

ナレーション テレビ局に勤める父は、仕事で家を空けることが多く、恵理子とは3日も顔を合わせない、などというのはしょっちゅうでした。
次の日、学校で――。

(効果音) (教室のガヤ)

A子 ねえねえ、ちょっと、あそこ歩いてんの、恵理子んちのお母さんじゃない？

恵理子 え、どこ？

B 子 あ、ほんとだ。ほら、校門のところ。あの、めかし込んだ後ろ姿は、絶対恵理子の…。

A 子 バカ、あんたは一言多いんだよ。

B 子 悪い 悪い。

恵理子 ほんと、お母様だ。でも、どうして？ 学校に用があるなんて言ってなかったのに。

(効果音) (教室のドアが開く音)

男子 おい、森山。お前のおばさん、すげえよなあ。おれ、最高怒ったぜ。

恵理子 え？

A 子 何よ。恵理子に変な言いがかりつけないでよね。

男子 言いがかりじゃねえよ。今、職員室で先生と話してんの、聞いたんだからな。「うちの恵理子が、このごろ落ち着きがないのは、クラスの友達が柄が悪いからでござあますわ」ってよ。

一同 (笑い)

A 子 やめなさいよ。

(効果音) (教室のドアが開く音)

先生 何だ、騒がしいな。ベルはとつくに鳴ったはずだぞ。

男子 き、起立！ 礼！

(効果音) (ガタガタ席に着く音)

先生 え～、実は、みんなに話しておきたいことがある。これは、家の人にもよく言っ
てもらいたいんだが、お前たちはもう半分大人だ。自分の勉強や生活がう
まくいかないとき、それを、「友達が悪いからだ」とか、人のせいにするのは
卑怯だぞ。先生は、お前たちの親御さんに頼まれたからといって、だれだれと
は付き合うな、なんてことを言うつもりはない。そんなやり方は嫌いだからな。
それに、付け届けも一切受け取らん。いいな？

(効果音) (生徒たちのヒソヒソ声)

男子 森山～。

一同 (口々に)「え、恵理子のお？」「やっぱりね」

先生 だれだっがいい。それじゃあ、授業に入るぞ。

恵理子モノローグ ひどい。あたしに黙ってそんなことするなんて。いくらお母様でも赦せない。

ナレーション その日、思い余って恵理子は、父の会社に電話を入れてみました。

恵理子 もしもし、お父様？

父 (フィルター音)あ、なんだ、恵理子か。どうしたんだ？

恵理子 あの、今日ね、お母様が…。

父 (フィルター音)お母様がどうかしたのか？ (部下の声)「部長、東洋物産の方

がお見えます。」「森山部長、内線で一す」ああ、今行く！ 悪いな、恵理子、今忙しいんだ。また後にしてくれ。そうだ、お母様に小遣いを渡しておくから。

(効果音)

(受話器を置く音)

恵理子モノローグ そんなもの、要らないのに。

ナレーション 心の中でそういいながら、恵理子は重い足取りで、家に帰り着きました。

母 あら、お帰りなさい。今日は早かったのね。

恵理子 今日、学校に何しに来たの？

母 何って、ちょっとあなたの先生に…。

恵理子 (さえぎって)あかし、みんなの前で大恥かいたのよ。お母様のせいよ。

母 お母様は、あなたのことを心配してるの。だって、なんにも話してくれないし、ピアノのおけいこもちっともしないし、机の中には、お母様の知らない人からのお手紙が…。

恵理子 勝手に人の部屋に入らないで。もうほっといてよ。ピアノ ピアノってそんなに言うなら、自分で弾けばいいでしょ。こんなもの！

(効果音)

(ヒステリックにピアノの鍵盤をたたく。)

母 やめて。やめてちょうだい。お願いよ。お母様には、あなたしかいないのよ。だから、いつだって、あなたのために思って…。

恵理子 それがイヤなの。あたしのためって、いつも自分の考えを押し付けるだけじゃない。もう構わないでよ。ほっといてよ！

(効果音)

(恵理子、バタバタと階段を駆け上がり、自分の部屋に閉じこもる。ロックのレコード音、次第に高まって――。)

<後編>

(音楽) (ロック音楽、高いボリュームで)

(効果音) (母が恵理子の部屋のドアをたたく音)

母 恵理子さん、開けてちょうだい。恵理子さん、お願い、ね、お母様が悪かったわ。謝るわ。だから…。(FO)

(効果音)

(ドアをたたく音)

ナレーション 母が彼女を何とかなだめすかそうとすればするほど、自分の心が閉ざされていくのを、恵理子は感じていました。

母 あ、恵理子さん、どこ行くの？ ちょっとお待ちなさい、恵理子さん！

恵理子 友達のとこよ。ほっといて！

母 あ、待ってちょうだい。お話があるのよ。ちょっと待って…

(効果音)

(ドアが激しく閉まる音)

母 あのこ、どうしたらいいのかしら。前はあんな態度とったことはなかったのに。2年生になってから、どうも落ち着きがないと思っていたら、こんなことに…。素

直でなんでも話してくれたのに、ほんとにどこに行ってしまったのかしら。あ、
そうだわ、確かあのこの学校の名簿があったんだわ。

(効果音)

(階下で電話のベル)

A 子

はい、もしもし。はい、そうですけど。はい、あたしです。あ、恵理子ですか？
来てますよ。今代わります。え？ いいんですか？ はい、はい、分かりました。
伝えますから。いいえ、平気ですよ。はい、それじゃ、さようなら。

(効果音)

(電話を切る音)

A 子

恵理子、おばさんからだったよ。心配してた感じ、すごく。クラスの子のどこ、片
っ端からかけたみたいだよ。恵理子に代わるって言ったんだけどさ、いいっ
て。

恵理子

ごめんね。

A 子

いいよ。あたしは全然平気だけさ。恵理子、おばさん、かわいそうじゃん。

恵理子

だって、あっちが悪いのよ。あたしだって、プライバシーってもんがあるでしょ。
もう小学生じゃないんだから、ベタベタしないでほしいの。それに、先生にまで
言いつけに行くんだもん。

A 子

まあ、恵理子の場合はさあ、今までがあまりにいい子ちゃんすぎたんだよ。だ
から、急に変わっちゃったんで、おばさん、ビビっちゃったんだと思うよ。

恵理子

そうかな。とにかく、あたしはこの際、お母様にこ離れしてほしいの。

A 子

えっらそうに。自分だって、ついこないだまで、「お母様～」って、ベツタリだった
くせに。

恵理子

何よお、もう。(二人、笑い)

ナレーション

それからしばらくは、少々気まずいながらも、なんとか無事に過ぎていったの
ですが、2週間ほどたったある日――。

母

ねえ、恵理子さん。もうすぐあなたのお誕生日でしょ。ちょうど土曜日だし、お
友達お呼びしたら？

恵理子

え、お誕生日会、やっていいの？

母

ええ。お母様も、あなたのお友達と会いたいし。何人くらいいらっしゃるかしら
ねえ。

恵理子

えーと、章子ちゃんと、明美ちゃんと、チイ子と、ミーと…。

母

ねえ、恵理子さん。今回は新しいお友達をお呼びしたら？例えば、ほら、津川
真由美さんとか、秋葉律子さんとか。津川さんは、学級委員をしてらっしゃる、
しっかりした方らしいじゃない。この前、PTA で、お母様とお会いしたけど、立
派ないいご家庭で、お父様はお医者様だそうよ。秋葉さんも、お勉強とっても
おできになるんですって？ あなたも少し、そういう方たちとお友達になったら
…。

恵理子

(さえぎって)それ、どういう意味？ 何が言いたい？ 明美たちと付き合うな

っていうこと？ だったらはっきりそう言えばいいじゃない。

母 そうじゃないわ。ただ、お友達をよく選んでお付き合いしないと、悪い影響でも受けたらって、心配なのよ。お母様は、あなたのこと思って。

恵理子 余計なことしないでよ。お母様なんかより、明美やミー子たちのほうが、よっぽどあたしのこと、分かってくれてるわよ。うちでは話せないことだって、なんでも打ち明けられるんだから。うちなんかより、友達というほうがよっぽどいいわ。

(効果音) (恵理子、ドアを閉め飛び出していく。)

ナレーション 恵理子は、悔しさと腹立たしさでいっぱいでした。もう母の顔なんか見たくない、うちへなんか帰りたくない、と心の中で繰り返しながら、当てもなく歩き回る彼女でしたが――。

早川先生 恵理子さん。森山恵理子さんじゃない？ どうしたの、こんなところで？

恵理子 あ、先生。

ナレーション それは、ピアノの個人レッスンを受けていた、早川先生でした。

早川先生 中学生が、こんな時間に危ないわよ。

恵理子 先生は？

早川先生 ええ。わたしはね、母と一緒に買い物して、食事してきたとこ。たまには親孝行しないとね。それより久しぶりね。どう、その後、まだピアノやる気にならない？ お宅やめたら、わたし、失業しちゃうのよねえ。

恵理子 え、ほんとに？ すみません。

早川先生 (笑い)冗談よ。それより、よかったら、お茶でも飲んでいかない？

恵理子 はい。

(音楽) (喫茶店のBGM)

恵理子 先生。お母様と仲いいんですね。

早川先生 なあに、急に。そうねえ、まあまあね。お宅のほうは？ 優しいお母様もお元気？

恵理子 はい、一応。

早川先生 「一応」って何？

恵理子 実は…。最近、ちょっとマズくて。今日も、ほんとはケンカして、あたし、飛び出してきちゃったんです。

早川先生 おっとお、やっちゃったのかあ。ケンカねえ。いいなあ、うらやましわ。

恵理子 え、うらやましい？ なんで？ ちっともよくないですよ。

早川先生 あら、ケンカできるっていうのは、いいことよ。それだけ親しい間柄ってことでしょ。

恵理子 そりゃそうですけど。でも、うちのお母…、母、ほんとにひどいんですよ。今日だって…。

ナレーション 恵理子は、久しぶりに会った早川先生に、心の中のモヤモヤとした思いを話し

ました。

早川先生 ふーん。そんなことがあったわけ。それにしても、わたしはやっぱりうらやましいな。そんな風に、お母様に反発できるあなたが。

恵理子 どうしてですか？

早川先生 わたしは、中学生の時は、母に遠慮して言いたいことも言えなかったから。

恵理子 遠慮？

早川先生 そう。今の母はね、2度目の母なの。わたしを産んでくれた母は、わたしが小学生のときに亡くなって、中学の時、今の母が来たの。別にイヤな人じゃなかったのよ。それどころか、とてもよくしてくれた。母にも1人、小さい子がいたんだけど、わたしもその子も同じようにかわいがってくれてね。母はクリスチャンだったんだけど、その影響で父も教会へ行くようになってね。わたしも誘われたけど、なんとなく気が進まなくて。そのうちに、だんだんわたしだけ取り残されて、ほかの3人ばかり楽しそうに仲良くしてるような気がしてきちゃって。母に対しても、なんかこう、よそよそしい態度になっちゃって。それでとうとう、ある時、家を出ちゃったの。

恵理子 家出を？ 先生が？

早川先生 まあね。最初は、そんなつもりなかったんだけど、家に帰りたくなくて、小学校の時の友達んち泊まって、次の日、上野の辺りを歩いてたら、お巡りさんに見つかっちゃった。搜索願が出てたのね。母がね、交番に迎えに来てくれたんだけど、わたしの顔見るなりね、ビンタが飛んできてね。

恵理子 すごい。

早川先生 すごかったわよ。痛いっていうより、ビックリして、わたし、何も言えなかったもの。わたしの家出を知った時、お友達の家、片っ端から電話して、その晩は寝ないで祈ってたんだって。その日、家に帰る道々、初めて母といろいろ話したの。その時、こんなこと言われたのよね。「確かにわたしたちは血はつながっていない。だから、始めは気を遣うかもしれないけど、でも、まっすぐにぶつかってほしい」って。「血を分けた親子じゃなくても、本当の父なる神様につながる、“神の家族”になろう」って。

恵理子 “神の家族”って何？

早川先生 ええ。わたしもね、その時はよく分からなかったんだけど、その後、母たちと教会に行くようになって、だんだん分かったの。わたしたちをつくって、愛してくださっている神様、その神様を信じている人同士は、一つの家族なんだってことが。ね、恵理子さん。人間同士って、黙っててもうまくいくってこと、少ないんじゃないかしら。親子だって、努力しなくちゃ、ギクシャクしちゃうでしょ？

恵理子 うん。ほんと、そう思う。

早川先生 お宅の場合は、特に、お母様よりあなたのほうが、ちょっぴり早く成長しちゃう

たのかもね。きっとお母様、戸惑っていらっしゃるのよ。そんなお母様の、弱い、人間らしい部分を、ありのままに受け入れられるようになったら、前とは違った意味の、もっと強いきずなができるんじゃないかな。そして、ただこの世で血がつながった家族っていうだけじゃなくて、たとえ違ったところがいっぱいあっても、深いところでは、神様の愛でしっかりつながってる、そんな家族になってほしいな。恵理子さんにも、お母様にも。

ナレーション

恵理子は、いつか早川先生の家に行った時の、まるで姉妹のように仲のよい先生とお母さんのことを、ありありと思い出していました。そして、無性に、母に会いたい気持ちに駆られながら、“神の家族”と心の中でつぶやいたのです。

<完>